

令和7年度自己評価シート(中間評価)

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	吉村 薫	全・定・通	本・分
----	------------	-----	----------------	------	------	-------	-----

1(1)国際バカロレア教育(IB プログラム)を教育活動の主たるツールとし、探究ベースの深い学びを展開することにより、本校の教育目標の達成を目指す。

【短期(本年度)経営目標】 IB プログラムの特色を活かした6年間の系統的な学びを実現し、主体的に学び続ける生徒を育成する。	
【本年度行動計画】 ○ 授業改善： 週1回実施するIB研修を充実させ、組織的・計画的に主体的・対話的で深い学びを実現する授業を実践する。 ○ 指導力向上： ルーブリックを用いた適切な指導と評価の改善を図り、生徒の習熟の程度や学習状況に応じた指導を行う。	評価
	A

【短期(本年度)経営目標】 日本語でも英語でも議論・協働できる高い語学力を育成するための指導体制を確立する。	
【本年度行動計画】 ○ 言語運用能力の指標であるCEFRの到達目標を教員・生徒・保護者が共有しながら具体的な目標設定を行い、生徒の英語能力の向上を支援する。 ○ 個に応じたカリキュラムを作成し、生徒の日本語能力の向上を支援する。	評価
	B

【短期(本年度)経営目標】 生徒一人一人の進路実現の可能性を広げ、個別最適な進路支援体制を整備する。	
【本年度行動計画】 ○ 生徒の多様な進路希望に応じるために、タイムリーに個別の面談が受けられる体制を整える。 ○ 個々の進路実現の可能性を広げるため、海外プログラム等を充実させる。	評価
	A

1(2)中間評価のまとめ

評価結果の分析	○ 第1回IB授業アンケートでは、生徒の各教科に対する主体性を測るアンケートを実施した。4段階自己評価の結果、MYPの平均値は3.48点、DPの平均値は3.51点となり、目標値である3.5点に近い数値を達成した。MYPでは、様々な形式のパフォーマンス課題に生徒が取り組む中で、個々の興味・関心を探究する姿が確認された。また、DPでは、生徒が主体的に進路を決定するため、6教科の科目選択と上級レベル(HL)・標準レベル(SL)の選択を自ら行い、より主体的に授業に臨んでいることが、数値から読み取れる。 ○ CEFR B2レベル到達に向け、英語科教員を中心に英語学習に係る個人面談を実施し、生徒の英語力向上に向けた目標設定や学習方法の支援を行っている。また、三者懇談会においても、担任が保護者・生徒の希望進路等を丁寧に聞き取り、進路実現に向けて、英語学習へのさらなる動機づけを図っている。 ○ 中学生については、定期的な生徒面談や三者懇談を通じて進路支援を行った。高校生については、学年を問わずニーズに応じた個別面談を実施し(9月現在で約600回)、一人ひとりに適した支援を行うことで、個別のキャリア形成を充実させることができた。また、「自己理解」「自己実現」に関する進路アンケートでは、肯定的な回答が「自己理解」76%、「自己実現」63%であり、学年が上がるにつれて肯定的回答の割合が増加する傾向が見られた。これは、発達段階及び学年に応じたキャリア形成を着実に推進できていることを示しているものと考えられる。
今後の改善方策	○ アンケートの結果を踏まえ、生徒の主体性がより発揮される授業づくりを推進するため、2日間の夏季研修において教科ごとのアクションプランを作成した。今後は、本プランに基づく実践の中間評価を実施し、年度末に向けて各教科における授業改善とその検証を継続する。 ○ 個人面談における目標と評価結果のギャップ分析を通じて学習計画を個別に最適化するとともに、三者懇談会において進路希望とCEFR B2レベル達成に必要な要素を共有し、学校と家庭の間で共通理解を形成する。

	○ 引き続き個別面談を実施するとともに、アンケート結果を活用した個別の進路支援の充実を図る。また、発達段階や学年に応じた進路支援に加え、海外プログラム等の実施とその振り返りを進路支援と関連付けることで、生徒のキャリア形成をより効果的に促していく。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策	○ 日常の生徒との面談において、外部人材からの支援が必要な場合には、本校の人材バンクを活用するなどして、外部人材の力を借りながら、適切な進路支援を行っていく。

2(1)学校生活・寮生活でのあらゆる場面において、多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通し、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める。

【短期(本年度)経営目標】 生徒が、「IB の学習者像」を自身の行動指針として意識し、自律したリーダーになることができる。	
【本年度行動計画】 ○ 生徒が、「IB の学習者像」を活用し、日常的な場面における自身の行動について Forms 等を活用して振り返る場面を月に1度設定する。 ○ 生徒と教職員間で目指す姿について共通認識を持つことができるように、定期的に情報共有や研修を充実させる。	評価 A

【短期(本年度)経営目標】 生徒が、地域や世界、学校等、自分が所属するコミュニティの「より良い未来」を創造できるリーダーになる志を持つことができる。	
【本年度行動計画】 ○ 生徒がリーダーシップを発揮できるように、生徒会活動や学校行事、学級活動内において、リーダーとして活躍できる機会を多数設ける。 ○ 寮において、生徒によるユニットミーティングを実施し、課題発見・解決のサイクルを回す取組の指導・支援を行う。	評価 B

【短期(本年度)経営目標】 生徒が、自立した大人になるべく、自らのライフスタイル（学校生活・寮生活）を改善し、健康管理に努めることができる。	
【本年度行動計画】 ○ 生徒が保健指導等によって、睡眠に関する正しい知識を獲得し、実践に移すことができるよう支援する。 ○ 給食指導、食育指導を通して、健やかな心と体を育むための食に対する意識の向上をさせる。	評価 B

2 (2)中間評価のまとめ

評価結果の分析	○ IB の学習者像に関する生徒対象アンケートにおける肯定的評価の割合は、86%（前年度 83%、目標値 90%）であった。年度当初から継続した振り返り活動の効果が一定程度あったと読み取ることができる。また、教職員対象アンケートにおける肯定的評価の割合との差異は 3%（前年度 23%、目標値 10%）であった。先述の生徒の振り返り活動における記述を適宜共有し、各教育場面での活動を推進したことが効果的であったことを示している。 ○ 学校行事後に実施した生徒対象アンケートにおける肯定的評価の割合は、74.3%（今年度新規、目標値 80%）であった。生徒の記述を分析すると、フォロワーシップを発揮したと自己評価している生徒は多いが、リーダーシップを発揮したと自己評価している生徒が少ない。今回の学校行事（学園祭）においてリーダーシップを発揮するのは、実行委員等に限られていたことから、このような結果になったと推察する。寮に関する生徒アンケートの肯定的割合は、81.5%であり、寮職員の評価との差異は無かった。ただし、課題解決に向けた取組状況は性別や発達段階で散らばりがあるため、改善する必要があると捉えている。 ○ 睡眠に関する生徒対象アンケートにおける、肯定的評価の割合は、66%（前年度 66%、目標値 70%）であった。否定的評価の主な原因は「学習量過多」「セルフマネジメント力不足」「不安定な生活リズム」であった。また、否定的評価の割合は高校生よりも中学生が 1 割程度低かった。現在実施している保健指導等の効果をさらにあげていくことが必要である。食生活に関する生徒対象アンケートにおける、肯定的評価の割合は、88%（前年度 88%、目標値 90%）であった。生徒の詳細な回答からジュースやインスタント食品等を避ける意識が高い生徒が多い一方で、好き嫌いに対してあまり意識できていない生徒が多い。IB の学習者像に対する全校的な取組の主体を生徒に委ねてより一層の推進を図るとともに、教職員間における意識喚起も継続して行う。
---------	---

今後の改善方策	○ リーダーシップやフォロワーシップについて、学校行事だけでなく日常生活における場面も含めて振り返る機会を設ける。リーダー会等、生徒の自治的な活動の充実を図るため、寮職員との連携を密に行なう。 ○ 保健だよりの定期発行やデジタルサイネージを用いた啓発活動を継続するとともに、生徒会健康委員会等を通じて生徒同士の働きかけを充実させる。また、各学年と連携して学活・LHR等を通じた食育指導を充実させるとともに、生徒会給食委員会による啓発活動を行う。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策	○ 上記の「今後の改善方策」を着実に実行する。 ○ リーダーとリーダーシップやリーダーシップとフォロワーシップの関係性といった基本的な概念に関して、教職員間や生徒間、教職員と生徒間での対話を進めることで共通理解を図る。 ○ 生活習慣をはじめとする諸課題を抱える生徒に対して、全体へのガイダンスとあわせて個別のカウンセリングを充実させる。

3(1)働き方改革に関する短期(本年度)目標

1 短期(本年度)経営目標 【短期(本年度)経営目標】 教員が、子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている。	
【本年度行動計画】 子供と向き合う時間を確保するための方策について、各分掌や学年の会議で検討し、職員会議で定期的に共有する。	評価 B

【短期(本年度)経営目標】 教職員全員が勤務時間に対して高い意識を持ち、時間外における勤務を縮減している。	
【本年度行動計画】 働き方改革を意識した業務遂行ができるよう、業務分担・進捗状況について、定期的に点検・見直しをする。	評価 A

3 (2) 中間評価のまとめ

評価結果の分析	○ 学校衛生委員会では、在校時間の縮減に向けて意識統一を図るとともに、時間外勤務の実態を可視化している。 ○ 勤務時間について、個々の教職員がタイムマネジメントを意識できるように、月初めに個人の勤務時間表を提示し、職員朝礼等で確認を呼びかけるようにしたことで、一月当たりの時間外勤務時間が45時間以下の教職員の数が93%となっている。(目標値95%) ○ 年次休暇の年間取得目標を10日間以上とし、年休の計画的な取得を呼び掛けている。
今後の改善方策	○ 年次有給休暇の計画的な取得や帰宅時間の目標設定等について、日頃からの呼びかけを継続するとともに、分掌や学年内での研修実施時にはタイムリーなフィードバックを行う。 ○ 各分掌の業務分担や進捗状況について今年度の課題を明確にし、来年度に向けて、働き方改革に資するよう機動的な校務分掌となるように見直しを図る。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策	○ 上記の「今後の改善方策」を着実に実行する。